

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 40

1992年1月20日

第40号 目 次

1. 理事会報告
2. 会員活動報告
3. 書 評
4. 学術・文化情報
5. 近着会員業績
6. 事務局から
- 海外ラテンアメリカ研究センター
紹介 (12)

1. 理事会報告

○第53回理事会 1991年12月21日 (土)

場 所: 上智大学

出席者: 細野理事長、松下、恒川、水野、中川(和)、高橋(書記)各理事。委任状4通。

1) 第51、52回理事会議事録の確認。

2) 第13回大会準備について

準備委員会よりシンポジウム「ラテンアメリカ500周年をふりかえる」の腹案が寄せられた。分科会と並行してミニシンポジウム「日本におけるラテンアメリカ系労働者」を開催する案が出された。

3) 10周年記念事業について

『ラテンアメリカ関係定期刊行物一覽』は大会で配布を目標として作業する。

4) 理事選出方法について

次回理事会で最終案を作成し総会に諮ることとした。

5) 国際交流について

6) 年報編集について

寄稿申し込み状況等経過が報告された。

7) 各委員会報告

8) 新入会員5名の入会が承認された。

川田玲子、睦月則子、片桐未佳、富田与山、山脇千賀子

2. 会員活動報告

○ラテン・アメリカ政経学会

関東部会研究会

1991年10月19日 於、国際文化会館

ラテンアメリカ教育の諸問題

—比較教育史の視点から—

皆川 卓三

今夏、教授団の授業放棄による賃金倍増要求等のストライキの頻発するブラジルの連邦諸大学を訪問し、教育政策の一貫性の問題等、教育の根源的な課題を、歴史的視点を入れて比較考察した。ラテンアメリカ全体の高等教育においては、次の特徴があげられる。(1)国公立大学の優位、(2)大学運営への学生の参加の一般化、(3)大学自治への志向、関心、(4)専門職業資格取得への傾斜、(5)専任教員の欠如。こうした淵源は、植民地当時の大学設立、更には宗主国における大学設立に求められる。

スペイン系ラテンアメリカ諸国では、本国のサラマンカ大学やアルカラデエナーレス大学を主なモデルとして植民地各地で大学が設立されたのであるが、上記諸大学自体もその制度や志向の源を辿るならば、教授団中心の大学運営のバリ大学、特に学生団中心のボロニア大学といった中世ヨーロッパの大学にその範を求めることができる。

当時のサラマンカやアルカラデエナーレス大学はコレヒオの集合体であり、14~15歳から寮生活が行われ、大学自体が生活の場としての機能を果たしていた。そこでは、教養諸科から専門諸学問研究課程へと進む。このような制度や形態が南米に持ち込まれた結果、それぞれの大学の独立性と個性が強い反面、国家レベルで見えた場合、統一性、総合性が失われることとなった。ここで注目される大学の自治に関しては、やはり中世ヨーロッパの伝統を受け継ぎ、教授団、学生、卒業生三者間では、学生や卒業生の教授会に対する発言力が強い。

このように、ヨーロッパのみならず南米においては、最初に大学が創られ、ある特定の層によって様々な制度や慣行が伝統的に受け継がれたため、中等、初等教育との接合関係が円滑に運ばれないという状況をもたらしている。

この状況を日本と比較した場合、日本では下から上へ学校が創られていったと指摘され

る。つまり日本の学校教育全般を考えると、明治5年の学制布告以前に藩校や寺子屋教育に見られる庶民を含めた「読み、書き」能力養成がかなり浸透しており、生活習慣に根ざした学校文化ともいべき土台が社会全体に備わっていた。

このように認められる違いは、様々な問題と課題を生じさせている。特に人々の教育観、学力観に影響を与え、初等、中等教育、成人教育、識字教育間の接合のなされ方に問題を投げかけている。

教育の課題の解決や展望については、単にこの分野の数量的な考察ばかりではなく、現実の社会や政治、経済、文化との関わりの中で、歴史を踏まえて考えられていかなければならない。

○ラテン・アメリカ政経学会

辻 豊治

11月9日(土)10日(日)の両日、京都外国語大学にてラテン・アメリカ政経学会第28回全国大会が開催された。

初日には総会に続いて、オクタビオ・モラレス氏(駐日コロンビア)による「コロンビア社会の現状」とアントニオ・カルデナス氏(ペルー・ジャーナリスト)による「『すべての血』のペルーにおける労働の文化」の2つの記念講演が行われた。モラレス氏の報告では、コロンビアの概観、小史に続き、現政権が取り組む麻薬、経済開放などの問題が紹介された。カルデナス氏の報告では、フジモリ政権出現の基盤となったインフォーマルな民衆に焦点を当てて、文化や経済における担い手としての創意性が指摘された。懇親会では、ブラジルの経済学者ドス=サントス氏も参加し、和やかな意見交換の場となった。

2日目は以下のような一般報告と「ブラジルの環境問題」をテーマにしたシンポジウムが開かれた。

一般報告

「メキシコ新生にみるマリンチェの重要性」

熊谷明子(東京農大)

「ウルグアイ・ラウンドとラテンアメリカ」

石井陽一(神奈川大)

「センドロ・ルミノソ：その成立と展開過程」

上谷 博(天理大)

シンポジウム報告

「ブラジルの環境問題－特に熱帯雨林の保

護について」 有水 博(大阪外大)

「アマゾンにおける偽りの開発と森林破壊」

小池洋一(アジア経済研究所)

「ブラジル・サンパウロの都市化と都市問題」

山崎圭一(大阪市大)

ブラジルの環境問題といえばアマゾン開発があまりにも有名であるが、シンポジウムでは都市の大気汚染の深刻さ、セラード開発による森林破壊、大湖沼地帯バンタナールの保護問題などさまざまな環境問題の実態、問題の所在、過大視されている点などがそれぞれの立場から報告された。

○イスパニヤ学会

熊谷明子

10月26日(土)と27日(日)の両日、神戸市学園東町の神戸市外国語大学において第37回の年次大会が開催された。研究発表は、文法から文学、中世から現代に及ぶもので、それぞれの専門、関係分野において参加者から活発な質問がみられ、個々の研究に今後の展開を期待させるものがあった。研究報告は、以下の通りのプログラムにそって発表された。

- ・小池和良「動詞慣用句と複合動詞」
- ・木村琢也「スペイン人アナウンサーの発音に見られる<偽(にせ)アクセント>」
- ・片倉充造「エレンディアラの指向するもの」
- ・福井千春「口誦理論と『わがシッドの歌』」
- ・近松洋男「中世スペイン語の関係副詞」
- ・渡瀬迪「オーディオ・ビジュアル・メソッドと第二外国語としてのスペイン語－事例研究－」
- ・吉田彩子「Vázquez Siruelaと<Discurso sobre el estilo de Don Luis de Góngora>」
- ・山下好孝「比較級 más que と más de の意味解釈」
- ・山崎信三「スペイン語のアクセント教授法上の問題点」
- ・牛島信明「Ingenioの機能－セルバンテスとグラシアンの場合」
- ・上野勝広「アカデミア辞書の nauatlismo について」
- ・高山秀幸「『百年の孤独』とその物語形式」
- ・染谷宏「『ラ・セレスティーナ』の諸問題」
- ・佐竹謙一「カルデロンのコメディアにおける静と動のアクションについて」

海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (12)

コスタリカ大学社会調査研究所

Universidad de Costa Rica

Instituto de Investigaciones Sociales

コスタリカ大学(UCR)は、ナショナル大学(UNA、エレディア市)、コスタリカ工科大学(ITCO、カルタゴ市)、国立遠隔地大学(UNED、各地に分散)と並ぶ国立大学で、これらの中で最大規模のものである。UCRのキャンパスはサンホセ市の東の郊外に位置し、小規模ながら大学都市を形成している。社会調査研究所(IISと略記)は、UCRの社会科学部付属の研究機関として1975年に設立された。初代所長はDr. Daniel Camacho、以下Dr. Jose Luis Vega Carballo、Dr. Jorge Rovina Masと受け継がれ、1987年以来Licda. Dina Krauskopf 女史が所長を務める。

IISはコスタリカおよび中米の現実に焦点をおいて社会科学諸分野の学際的な研究を行い、その成果を普及することを目的としている。IISの運営は、社会科学部の助言審議会と同じメンバーで構成される研究所助言審議会(Conseje Asesor de Instituto)によって調整される。財源は大学の予算の他、国内外の財団等からの助成金である。IISはCLACSO(ラテンアメリカ社会科学協議会)のメンバーとしてラテンアメリカの他の社会科学研究機関と連携関係にある。またサンホセに本部をおくCSUCA(中米大学最高審議会)とも密接な協力関係にある。

IISの調査研究活動は共同研究のプログラム(Programa)として組織される。現在進行中の研究プログラムは以下のとおりである(括弧内はコーディネーター名)。

- (1) コスタリカおよび中米の農村開発問題(M. Fernandez)
国の経済・社会政策がコスタリカ農業の大衆部門に及ぼす影響、社会的参加と臨時雇用農業労働者等の研究
- (2) コスタリカにおける社会運動(D. Camacho)
大衆運動および支配層の行動、政策の体系的な分析
- (3) コスタリカにおける社会的所有：協同組合主義を中心に(M. Rojas)
コスタリカにおける協同組合主義の社会経済的状況の分析

- (4) 人口と開発問題(D. Krauskopf)
政治的、社会経済的發展における人口要因の分析
- (5) コスタリカにおける社会科学調査研究の方法論(C. Raventos)
社会科学の方法論に関する諸問題の識別と再検討
- (6) 中米の政治(M. Vega)
中米の政治プロセスを各国内、地域、および国際的な関連で分析する。
- (7) 社会的制御の構造(L. Chacon)
公的、私的な社会的制御およびその表現に関する諸問題の概念整理

IISの研究プログラムに参加している者は、IISの専任スタッフの他に社会科学部の教官、学内の他の研究所のスタッフなどで、合計34名になる。とくに女性の研究者が多いのが目立つ。Krauskopf 所長、Mayra Achio 副所長はじめ20名が女性である。

IISの出版物には以下の種類がある。
Revista de Ciencias Sociales (季刊、1977~)

Anuario de Estudios Centroamericanos
(1974年から84年まで年1回、85年以降年2回)

Anuario de Cooperativismo en Costa Rica (年1回、1991~)

Contribuciones (研究報告シリーズ、不定期、1987~) 現在までにNo.0~No.7まで刊行されている。

Avances de Investigación (研究成果シリーズ、不定期) 73冊刊行されている。

Información Documental (文献情報、不定期)

Serie Documentos (情報シリーズ、不定期)
単行書 La elite ganadera en Costa Rica, Democracia en Costa Rica 他数冊が出版されている。

IISの住所、連絡先は以下のとおり。
Instituto de Investigaciones Sociales
Universidad de Costa Rica, Ciudad Universitaria Rodrigo Facio, C.P. 2060
Costa Rica, Tel (506) 53-3721
Fax (506) 24-9307
石井 章(アジア経済研究所)

3. 書評 染田秀藤『ラス・カサス伝 — 新世界征服の
審問者』 岩波書店、1990年、357+20
ページ。

評者：山崎眞次（早稲田大学）

コロンブスの新大陸到達 500 周年を控え、ラテンアメリカをテーマにした様々な分野の著作が相次いで上梓されている。コロンブスは我々に「ラテンアメリカ」について、ここでじっくり再考するチャンスを与えてくれているのかも知れない。

これまでアメリカニスタの間ではその存在を誰知らぬ者はいなかったラス・カサスであるが、近年、彼に関する研究が盛んになるにつれ、他分野・他地域の研究者の口の端にものぼるようになってきた。しかし、ラス・カサス研究が進められてきたとは言っても、それはルイス・ハンケ、マヌエル・ヒメネス、マルセル・パタイヨンらなど外国人研究者によるものであって、我が同朋による本格的な研究は多くはなかった。その理由の一つは絶対的研究者不足という点にあるが、最大の理由はラス・カサスとその生涯に残したスペイン語とラテン語の膨大な著書・書簡・報告書・陳情書であろう。その他に彼に関する大量の西・英・仏語の研究論文を前にすれば、大抵の研究者が尻込みするところである。それらを物ともせず日々研鑽を積まれた著者に敬意を表するところから書評を始めます。

本書ではラス・カサスの誕生からその死までがほぼ年代順に13章に分割されている。インディオの生存権と自由の擁護を訴えつつも、インディオに対する征服戦争を容認したモトリニアやキローガに代表される16世紀のインディヘニスモとは到底相い容れなかったラス・カサスの全人類的愛に基づく普遍的イデオロギーが全編を通してつぶさに展開される中で、特に二点が強く印象に残った。一つは彼のエネルギー的な行動力であり、もう一つは、ラス・カサス、植民者、国王の三角関係である。「インディアス史」に代表される多大の著作、国王や枢機会議への報告書と陳情書、司教や同輩への書簡など、夥しい著作活動、面会、証言、折衝などの積極的な官廷活動、5度に及ぶ太西洋横断、インディアスでの布教活動。まさに鬼神のごとき働きぶりである。本書はラス・カサスの細々とした日常生活には触れていないので、行間より想像するしかないが、よほど健康に恵まれ、堅忍不拔

の人物であったに違いない。その卓越した体力と意志が兼備していたからこそ、四方八方から間髪を入れず攻撃してくる敵によく太刀打ちできたのである。エンコメンデーロを完膚なきまで面罵し、法学者を徹底的に論破する擁護者の姿はインディオたちに頼もしい人物に映ったことであろう。

ラス・カサス、植民者、王の三者の関係は、両端に揺れ動く振り子を連想させる。左端にラス・カサス、右端に植民者が位置し、対インディオ政策をめぐる、王という振り子は左から右へ徐々に揺れるかと思えば、また少し左へ戻ったりしながら、最後は両端を共に弾き飛ばしてしまうのである。ラス・カサスはエンコミエンダの即時撤廃、布教を口実とした征服戦の中止、平和的改宗化の三点を一貫して主張するが、王と王室の見解は猫の目のように目まぐるしく変化する。それはスペイン国王がカトリック教の擁護者を自認していたにもかかわらず、ドイツの新教徒諸侯、フランス国王、イタリア諸国との相次ぐ戦争で軍事資金が欠乏し、エンコメンデーロの献金が必要であったからである。初め、国王を自分の意見の賛同者と見て王権を擁護していたラス・カサスであったが、フェリペ2世がエンコミエンダの世襲化を承認するや、「国王は専政者を厳しく処罰しなかったゆえに、神罰を受けることになるだろう」と国王を痛烈に非難し、次第に国王の政治責任を理論的に追及していく。

また、もう一つ、本書を語る上で看過できないのは、インディオに対する征服戦争の正当性についての神学的・法学的解釈の変移である。アレキサンデル6世の「贈与大勅書」の解釈をめぐる、パス、ルビオス、ビトリアの論点が明確に示され、やがてそれはバリャドリッドでのセプルベダとの論戦でクライマックスを迎える。最後に問題点を一つ挙げるとすれば、ラス・カサスの黒人双隸容認論から否定論への転換が今一つ明瞭に立証されていない点であろう。文体は平易で引用文が短く、注がないので、いちいち巻末を見る必要もなく最後まで集中して通読できる。

書評 山本哲士『コンビビアルな思想 — メヒコから見えてくる世界 —』 日本エディタースクール出版部、1990年

評者：阿波弓夫（フリージャーナリスト）

メヒコは不思議な国だ。妙に表現したい誘惑に人を駆り立てる。その気になって説明しだすと、ただ饒舌になるばかりで至難の業だ。客観視するなり、語りえない部分として後方に退いてしまうメヒコがある。それとの「距離」は、交通手段やエレクトロニクスの発展によっても解消されそうにない。このような「観察する側」（＝思想）と「暮らす側」（＝現実）との認識の乖離は、口にくそ出さずとも、メヒコを知る者には常識的に受けとめられていることだ。山本哲士氏はこのような「常識」の大転換を旨とした初めての研究者だ。その成果が本書『コンビビアルな思想』だが、本書成立の動機はそれだけではない。決定要因はむしろ、1975年以降のメヒコとの出会いであり、娘ルリカが存在だろう。

本書は激しい情念に満ちている。それは山本氏が「わたしとルリカの間にあるものそれ自体が、日本とメヒコのひとつの現実的な関係」（P. 76）と見做すが故のこと。「大衆の日々の生活のエネルギー」の描かれぬラテンアメリカ研究を一蹴し、境界線を設定するのも、それは産業的価値基準では理解しえないという経験に裏付けられた自信ゆえだ。山本氏は（クエルナバカのI、イリイチの下で）「先進的に豊かな産業社会のあり方を批判する思考を学ぶうちに、思考と現実との間に全く別の価値存在のあること」に気付いた、と思想的転機を語る。彼はそこで「価値存在」を他の産業的価値から「生活現実」と識別し、そこに語り尽せぬ民衆の境界を見出す。従来ラテンアメリカ研究や、イリイチの産業社会批判のいずれもが感知しえなかった、産業的なものとバナキュラー（原生活的）なものとの最適均衡状態を措定し、「コンビビアルなもの」あるいは「思想」と命名し摘出するに至る。

本書は山本氏が自己変革を遂げるべく展開する思想的格闘のクロニクルでもある。娘ルリカとの父子関係を内なる目・メヒコ関係と置き換えた彼にとり、自己変革を通じて産業的価値観を乗り越える以外に直接的な対話の可能性はなかった。その格闘は、①日本人・山本における帝国主義性からの脱却、②研究者・山本における思考と現実との統一の必要性、③父親・山本における愛と孤独の「レア

リダード」の受け入れ、をめぐって幾重にも展開される。と同時に、これらは本書に一貫して流れる三つの問題意識、つまり主柱ともなっている。①においては、日本人としての帝国主義性を解き放つ存在として一個人くわたりを設定する。そして、メヒコの生活現実に融け込むく他所者」のあり方を模索する。②では、感じるしかない世界を言葉を使って客観的に論述することの矛盾を掘り下げる。そして、③においては、娘ルリカとの対話のある関係を維持するため欧米的価値基準を自己変革を通じて切断する。しかし、ルリカが数字や文字を学べば、意識は自と学校化され早晚父親との産業的「落差」に気付く。ましてや、今日の「メヒコの崩壊的な社会現実のなかで」（P. 77）より急速に産業的思考に追いやられることへの危惧、等々が主題だ。

本書はまた、182ページを境に前半部と後半部におおよそ二分できる。（ただし、前半部の「書下し」部分については作成年代的にむしろ後半部に属す。）前半部では、父親、研究者、日本人という三つに「断裂」される山本氏の矛盾が統一を求めて激しく、手持ちの理論を総動員して格闘する。激賞か、全否定か、といった評価基準の両極化するなかで、彼は頑なに自説を深化させる。張りつめた胸の内が一気に炸裂したような激しい衝激を読む者に与える。後半部で山本氏は激しい亀裂を見せる。三人に断裂した山本が激しく一点に凝縮するかのように理論的熟考と反省を通じて和解を求める。（「知ること」と「学ぶこと」、「変るもの」と「変らないもの」といった概念上の種別化に至る。）

山本氏の功績は、メヒコの語り尽せぬ芯の如き部分を「コンビビアルなもの」として認知し、研究主体の自己変革なしにはそこに（つまり、生活現実）真にアプローチしえないことを明らかにした点だ。それは単にラテンアメリカ研究に質的転換を求めているだけでない。自ら研究者としてそうありたいという決意そのものであり、またルリカへの愛の表明である。願わくば、G. マルケスや清水透氏の世界で自らのメヒコを語らせずに、もっとわれらが青春の日々を描いてほしいと思う。

書評 西島章次編「ラテンアメリカのインフレーション」 アジア経済研究所、1991年、283ページ。

評者：安原 毅（京都大学大学院）

ラテンアメリカのインフレに関しては古くは構造学派と貨幣学派の論争があり、現在尚様々の議論がなされている。しかし'80年代に各国で見られたハイパーインフレは従来の理論的枠組みでは説明しきれない。その意味で本書で西島氏が行なっておられる、マネタリストと構造派の理論を総合して「初めてラテンアメリカのインフレを説明することが可能になる」という問題意識に立った分析は、極めて的を得たものといえる。

理論モデルを扱った章では、オーソドックス型の安定化政策に比べてヘテロドックス型の方が実質面のコストが小さいことが示される。しかし後者も所得政策と組合わせねばならないし、更に同じ政策が繰り返されれば次第に民衆の信頼は低下する。こうして一方で対外借入の困難化と財政赤字から通貨増発によるインフレ税が拡大し、他方政策に対する信頼の低下からインフレ期待の上昇とドラーリゼーションが生じてハイパーインフレの原因となる。単純なモデルで複雑な現象を説明するという点で、成功したモデルといえる。

4章以後ではアルゼンチン、ブラジル、ボリビア、チリ、メキシコの'70年代から'80年代のハイパーインフレとヘテロドックス型安定化政策が順に分析される（但しメキシコの場合は寧ろ高インフレとされている）。大まかに分類すればアルゼンチンとメキシコに関しては新構造学派、他は新自由主義的方法での分析である。これは論者の見解の不統一というよりは各国でのインフレに対する支配的見解をまとめたものといえよう。ここでの共通の問題提起を整理しておこう。

- ・累積債務の利払い負担と資本市場の未発達（いわゆる金融抑圧）の結果、財政赤字の補填にインフレ税が重要となったこと、
 - ・為替政策による国際収支の悪化とインフレ対策、特に通貨供給管理とのジレンマ、
 - ・ドラーリゼーションと資本逃避の重要性。
- 各国で安定化政策の政策目標が実はこうした關ドル管理にすり替わってしまっている。
- ・そして特にアルゼンチンでは所得分配を巡る各利益集団間の対立、ブラジルとチリでは

国営企業の民営化に伴う問題が重要視されている。後者は現在多くの低開発諸国が直面する問題だけにその指摘は読み応えがある。

以上のとおり本書の研究は各国のインフレにおいてそもそも何が問題であるか、という基本的な点を明確に指摘してくれている。特にハイパーインフレが極めて短期に発生し収束した点がモデル・実証両面で重視され、財政赤字とインフレ税、ドラーリゼーションといった複雑な問題の因果関係が注意深く説明されている点は重要である。そして安定化政策に対する民衆の信頼の低下によるインフレ期待の上昇がハイパーインフレの決定要因として重視されている。

ここで敢えて付言すれば、インフレ期待が現実のインフレに連動するプロセスについてもう少し立ち入ったモデル化が望まれるのではないだろうか。尤もこれは短期モデル自体の限界でもあるが、高インフレが慢性化した経済では為替切下げ、利子率上昇といったシグナルは供給サイドだけでなく流通の各段階において即座に価格に転化される。従って過去のインフレ期待と貨幣需要関数とがインフレ率を決定するだけでなく、特定の変数の動向がインフレ期待を通じて瞬時に価格に影響を与えるというプロセスがハイパーインフレにおいては重要ではないかと思われる。

他方安定化政策の評価については各章ともその結果が重視されているが、私見では寧ろこの政策の決定過程にこそ問題点が多いと思われる。ラ米諸国では政府官僚に工業連盟・商工会議所・労働組合といった特定セクターの協議によって政策方針が決定される場合が多く、多数の低所得階層はここから排除されている。従って安定化政策自体が社会中立的なインフレ対策では在り得ないのである。

以上ないものねだりに指摘した点は従来の理論自体が持つ限界でもある。現在も幾つかの国はハイパーインフレの危険にさらされているが、従来の理論を総合・発展させるといって本書の問題意識は今後更に高められるべきものといえよう。

4. 学術・文化情報

i) Congreso de Cultura Hispanica

開催のお知らせ

1992年8月12日～14日にチリ大学で開かれる予定。

ii) 1991年度文部省科学研究費補助金を受けたラテンアメリカ地域関係課題一覧

<一般研究C>

○「南米ペルー原住民(プレインカ時代)人骨の人類学的研究」

加藤克知(長崎大学併設短期大学部)

<国際学術研究>

○「メキシコ西部のリフトに伴う沈み込み帯火山活動」(メキシコ)

青木謙一郎(東北大学)

○「気球による活動銀河核等からの硬X線・ガンマ線の調査研究」(ブラジル)

釜江常好(東京大学)

○「新大陸産キク科ヒヨドリバナ属近縁植物の分子系統学的研究」(米国、ブラジル、エクアドル)

矢原徹一(東京大学)

○「アンデス疎地における新種レチナルタンパク質を保有する疎度好塩性古細菌の採集」(アルゼンチン)

向畑恭男(名古屋大学)

○「中南米の寄生吸虫症、特にブラジルにおける肺吸虫症の病態生理学的研究」(ブラジル)

辻守康(広島大学)

○「中緯度から赤道域にわたる超高層大気へのエネルギー輸送と変換過程」(ペルー、ブラジル、オーストラリア、カメルーン、インドネシア)

北村泰一(九州大学)

○「メキシコにおける宗教と法と医療の統合の様態の分析的研究」(メキシコ)

野村暢清(久留米大学)

○「アンデス南部・パタゴニア地域における近年の氷河変動の特性」(チリ、アルゼンチン)

成瀬廉二(北海道大学)

○「新世界ザルの通時的な社会構造とその生息環境である熱帯雨林の動態に関する研究」(コロンビア)

伊澤紘生(宮城教育大学)

○「中部アンデス地域の古生代後期古生物群集の解明」(ボリビア、アルゼンチン)

坂上澄夫(千葉大学)

○「熱帯新大陸における広鼻猿類の種分化に

関する研究」(コロンビア、ブラジル)

野上裕生(京都大学)

○「中南米におけるリーシュマニア症とその伝播に関する研究」(エクアドル、パラグアイ)

橋口義久(高知医科大学)

○「平成3年7月11日メキシコ日食による太陽コロナの観測」(メキシコ)

山下泰正(国立天文台)

○「高地アンデス都市の民族学的研究」(ペルー)

友枝啓泰(国立民族博物館)

○「環境資源利用をめぐる比較人類生態学：ボリビア第二次調査」(ボリビア)

柏崎浩(東京大学)

○「がん特別調査に関する総括研究」(チリ、米国、インド、ドイツ、インドネシア)

富永祐民(愛知県がんセンター)

○「ブラジルの森林開発と現地住民の意識」(ブラジル)

今永正明(鹿児島大学)

○「チャカルタヤ山におけるエマルジョン・チェンバー共同実験」(ブラジル、ボリビア)

藤本陽一(早稲田大学)

○「イベリア系文化圏における農村共同体の再編と都市の変容」(メキシコ、スペイン、ブラジル、チリ)

清水透(東京外国語大学)

○「ドミニカ共和国における虚血性心疾患の実態把握とリスクファクターに関する研究」(ドミニカ)

伊東盛夫(大分医科大学)

○「大深度用海洋構造物に関する研究」(ブラジル)

竹沢誠二(横浜国立大学)

5. 近着会員業績

〔抜〕田中敬一「ロサリオ・カステリャノスの小説(I)―『バルン・カナン』をめぐる一」(愛知県立大学外国語学部紀要、第23号、1991年3月)

〔抜〕佐藤悦夫「東南マヤ考古学の現状と諸問題」(筑波大学先史学・考古学研究、第2号、1991年)

〔籍〕国本伊代、乗浩子編『ラテンアメリカ都市と社会』(新評論、1991年9月)

〔籍〕Iyo Kunimoto, *Un pueblo japonés en la Bolivia tropical — Colonia San Juan de Yapacani en el Departamento de Santa Cruz*, (1990, Editorial Casa de la Cultura)

〔抜〕Chiyoko Mita, "A imagem do Japão e dos japoneses vista por brasi-

leiros: Análise comparativa Brasília e São Paulo" (*Iberoamericana*, Vol. XIII, No. 1, Primer Semestre 1991)

〔抜〕沼沢誠「モノカルチャー経済形成前史—ラテンアメリカに関する若干の考察—」

(『山形大学紀要(社会科学)』第13巻第2号、1983年1月)

〔抜〕同上「外国資本の流入とモノカルチャー経済の確立—世紀末葉以降におけるラテンアメリカの考察—」(『同上』第14巻第2号、1984年1月) (他5編)

〔抜〕青木芳夫「アンヘリカのペルー・クスコ・ケチュア語」(ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』第16号、1991年6月)

〔抜〕大串和雄「ペルー軍の社会学的素描に関する覚書—『ペルー革命』研究の手がかりとして」(『山形大学紀要(社会科学)』第22巻第1号、1991年7月)

〔抜〕同上「南米軍部の国家安全保障ドクトリンと「新専門職業主義」」(日本国際政治学会編『国際政治』第98号、1991年10月)

〔抜〕真鍋周三「十八世紀アルトペルーにおけるトゥパック・カタリの反乱の社会経済的背景」(青山学院大学文学部史学科『青山史学』第12号、1991年3月)

(以下、次号)

6. 事務局から

i) 寄贈図書

〔籍〕*Suplemento Antropológico*, Revista del Centro de Estudios Antropológicos, Universidad Católica, Vol. XXIV, No. 2, Diciembre 1989.

〔籍〕『*Studia Brasiliana* 創刊号』(ブラジル文学研究資料館、1991年7月)

〔籍〕吉田ルミ子・佐々木茂子共編『ラテンアメリカ地域欧文文献目録1980~1990年』(アジア経済研究所、1991年3月)

〔籍〕『中南米諸国便覧—1990年度版—』(外務省中南米局、1991年3月)

〔籍〕現代世界と文化の会編『griot (グリオ)』2号(平凡社、1991年10月)、特集—ラテンアメリカ・カリブ海地域

ii) 新入会員(第53回理事会承認)

編集後記

世界が激しく揺れた1991年はソ連邦消滅をもって暮れ、いよいよコロンブス500周年を迎えた。近代史の起点である1492年は、米州大陸に関心を持つ我々だけではなく、現代を生きる多くの人々に、「近代」の再検討という作業を迫ることになる。そしてこの作業が、新しい国際秩序の構築に生かされることを期待し、会報がささやかな役割を果たすことを願う。(乗 浩子)

No. 40 1992年1月20日発行
▽305 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学社会工学系細野昭雄研究室内
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎0298-53-5067